



開高健青春の闇 向井敏

文藝春秋版

略歴／昭和五（一九三〇）年、大阪に生まる。大阪大学文学部仏文学科卒。評論家、エッセイスト。とくに書評家として確乎たる名声あり。著書として『文章読本』『傑作の条件』『文章の貴族』『読書遊記』『本のなかの本』『虹をつくる男たち』（サントリー学芸賞）など多数。

---

## 開高健 青春の闇

平成四年二月二十五日第一刷  
平成四年三月三十日第二刷

著者 向井 敏

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三  
電話代表（〇三）三二六五―一二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 大口製本

定価はカバーに表示してあります

目次

夜はいつ明けるか

五

沖を夢みる

五三

いくつもの山いくつもの河

九三

夢の渚で

一三四



開高健  
青春の闇



夜はいつ明けるか

## 屈辱

腕、胴、脚をまっすぐに伸ばし、指でしっかりと握った鉄棒を軸として全身を車の輻やのように大きく回転させる体操技がある。今は何と呼ぶのだろう。あのころは大車輪といったのだ。

あのころ。戦後もまだ日の浅い昭和二十三年夏のはじめ。ところは旧制大阪高校のグラウンドの一隅。ランニングシャツに白いトレーニングパンツの体操教師がその大車輪を二度ばかり演じてみせ、鉄棒からひらりと飛び降りると、砂場のあたりにたむろしている少年たちに声をかけた。

「だれぞやってみんか」

体操の時間だからその場に在るだけで、鉄棒のことなど知ったことかといった面持で私語に余念のなかつた少年たちは、それを聞くと互いに顔を見合せ、一樣に首を横に振つた。大車輪は器械体操のなかでもかなりの大技で、よほど運動神経に自信がなければこなせるものではない。察するに、彼らも小学生か中学生のころ、一度はこの技に挑んで、というより挑まされて、砂を噛んだり、指を腫らしたり、なにかと痛い目にあつた覚えがあるのだろう。

だれかが顔の前で大げさに両手を交叉させて、とんでもないと叫んだ。まただれかが空に向つて高く口笛を吹いた。それに勢いを得て、少年たちは口々にまぜつかえしはじめた。からだを動かすのは苦手だが、口のほうはしごく達者なのである。

「虎穴に入つて骨を折るということもあるよつてに」

「君子危うきに近寄らずということやな。遠慮しとくわ」

体操教師はあきらめて時計をのぞいた。さて解散とみんなが腰を浮しかける。そのとき、ひとりの少年がゆっくりと歩み出てき、ひょいと鉄棒に取りついた。ナイフで削いだようにぎっくりとこけた頬に蒼黴い翳を溜めた、背の高い少年である。肩は瘦せ、腕は細く、その歩くさまは風に揺れる影のように頼りなげで、強い緊張と集中力を要求される体操技などとはおよそ縁がなさそうに見えたが、それが鉄棒を握るとからだのはしはしににわか

に力と張りが生じた。彼は両脚をぴたりとそろえて二度三度振りをくれ、間合いをはかって強く空を蹴った。

大きな円弧が中空に描きだされる。白いトレーニングパンツの男がおおと声を立てる。少年たちは私語を絶ち、何か信じられないものを見る眼つきでその円弧を追っている。

幾回転かののち、彼は鉄棒上に倒立して動きを止め、やがて宙を滑ってなめらかに着地した。砂がサクリと鳴った。見物の少年たちのあいだから拍手が起きたが、彼はそれには応えず、うつむいて呼吸をととのえ、額に落ちかかる髪を両手で払いあげると、出てきたときと同じように風に揺れる影に返って、人群れのなかにまぎれこんでいった。こんなことで喝采されては恥ずかしい、そんな感じをうしろ姿にただよわせて。

この少年がほかならぬ開高健。当年十七歳、大阪高校に入學して三月ばかりたったころのことである。ずっとあとになって知ったのだが、彼は中学生時代には器械体操部の古参の部員だったというから、大車輪の二回や三回、何ほどのことではなかったのかもしれない。しかし私にとっては、彼が中空に描いてみせたあの太円弧は、そしてそれ以上に、人眼に立ったことをはじるかのようなうしろ姿は、開高健という存在を鮮明に印象づける、はじめての出来事だった。

旧制高校は専攻する外国語の種類によって文科も理科もそれぞれ三つにクラス分けされ、

おもな履修語学が英語であれば甲類、ドイツ語なら乙類、フランス語だと丙類と呼ばれていた。欧米語の習得を教養の基本としてきた明治以来の国風を象徴するかのようなのこのクラス編成は、昭和二十四年の学制改革で旧制高校が廃止されるまで、久しく維持されてきた。戦時中の国粹主義者たちがよく槍玉にあげなかったものだと思ったことがあるが、開高健や私が属していたのはその文科甲類の最後のクラス。生徒の数は四十二人、翌年には学校そのものがなくなるはずで、せっかく難関を突破して手に入れた高校生活が一年きりで終ることをみんな意識していたせいであろうか、入学早々から互いに自分のありつたけを売り込み合い、クラスはいつも泡立つように騒々しかった。元来が引つ込み思案の私でさえ、巻き込まれて精いっぱい背伸びをせずにはいられなかったほどのだが、そうしたクラスの空気からできるだけ距離をとっていたい、そんな気配が開高健にはあった。

教室では最後列の席を選んでひっそりとうずくまっていたふうだったし、口数もいたってすくなくて、クラスのおしゃべりに加わって声を立てているような図柄は見ただけで覚えない。談論風発、饒舌と大声で鳴り響いた後年の開高健にしか接したことのない人には想像しにくいことだろうと思うが、逆に、当時の同窓生のなかには、あのひかえめで物静かな少年があんなに騒がしい男になってしまったことのほうがずっと意外だといぶかしむ人もいるにちがいない。

クラスの騒然たる空氣から距離をとるといっても、彼の場合はかたくなに自分のなかに閉じこもっているというのでも、みずから恃むところがあつて傲然と構えているというのでもなかった。人には話せない、何か屈辱的な事情があつて人眼に立つことを避けている、あるいはむしろ恐れているように見えた。

あの大量の一件以来、それまでまるで氣にもとめていなかった開高健という少年のことがたえず私の頭の片隅に引つかかつていて、眼のはじでその言動を追う癖がつき、それで気づいたのだが、一日の授業が終ると彼はいつもまっさきに教室から姿を消した。それも、大手を振ってさっさと退散するというのではなかった。教師が教壇を降りるのを待ちかねておしゃべりにふけつたり、額を集めて闇商売の情報交換だの、遊廓探險の報告だの、麻雀の貸し借りの精算だの、何ごとかあやしげな相談にとりかかったりしはじめる級友たちの動きをさっと眺めわたし、彼らの眼を盗むようにしてこっそりと立ち去るのである。人より早く帰ることをだれにもさとられたくないのではないか、そんなふうに思われた。しかし、どうしてなのだろう。当時は知るよしもなかったのだが、それは彼のいわば裏側の生活とたぶんにかかわっていたのである。

年譜によれば、彼は大阪府立天王寺中学校に入学したばかりの昭和十八年五月、小学教師だった父を不慮の病いで失っている。残された家族は老いた祖父と母と長男の彼、それ

にまだ幼い二人の妹と、あわせて五人。さいわい、祖父が何軒かの家作を持って、蓄えもいくらかあって、二十年八月の敗戦のころまでは一家は何とか世間並みの暮しをつづけることができたという。当時のことだからもちろん食卓は貧しく、イモやカボチャや野草で食いつなぐこともしばしばだったようだが、戦争末期の都会の家庭の食事情はたいていがそんなもので、とりたてて彼の一家だけが窮迫していたわけではない。あの時代は国じゅうが飢えていた。しかし、敗戦を境に、一家の暮しはただでさえ貧寒だった世間並みの水準から転げ落ちる。津波のようなインフレが稼ぎ手のいない一家を直撃、祖父のわずかな蓄えなどたちまち尽き、家作も次々に手放したが追いつくものではなく、惨憺たる日々がいつ果てるともなくつづくことになる。

後年、彼は往時の生活の悲惨と痛切をいくたびとなくエッセイに綴り、小説にもエピソードの形でくりかえし織りこんでいる。とりわけ印象的なのは飢えをめぐる回想で、餓鬼と化して食卓を囲む家族の光景や、飢えてのたうつ少年を描いた条々はいいたしい思いを誘わずにはいない。小説の世界に転位されて描かれた場合はことに。以下に引くのは遺作となった未完の長篇『花終る闇』に見える挿話。敗戦の年の冬、作者十五歳のころの体験をかえりみるという設定である。

家へ帰ると、暗い洞穴のなかで豆ランプに指さきほどの灯をともし母が手さぐりでふかしイモを食卓のザルにのせる。のせ終るか終らないかに、祖父、妹二人、叔母、母、私の手がのびてイモを奪いあう。そのとき、とぼしい灯のなかで眼と眼があうと、親子も、祖父も孫もあつたものか、食人鬼の精悍と凄涼で輝やいているのだ。私を見て母が眼をそむけて号泣をはじめるところを見ると私もまたその眼を持つているのだと痛烈に感知できる。吃人。喫人。人は人を食うのだ。血が見えるか見えないかはどうでもよかった。この一瞬に全貌が見えて、つぎの瞬間に消える。泣きじゃくる母をおいて二階にあがろうとすると、まっ暗な階段によろめいて眼華がゆっくり飛びはじめ、部屋に手さぐりでころがりこむと、胃のよじれるような衝動がやってくる。それを散らそうとすると、声にだして叫びたてなければならぬ。それをおさえようとして毛布を口のなかにつつこんで部屋じゅうをころげてまわる。飢えると寒くもなり、熱くもなる。寒波と熱波が交互に全身をふるわせてかけぬけていくと、あとには森閑とした深い、大きな穴がのこるだけである。

そして、「トトチャブ」の話。「トトチャブ」は水をたらふく飲んでベルトで腹をしめあげ、空腹をごまかすことをさしている朝鮮語だそうで、十五歳のころの開高健は毎日これ

をやっていたらしい。学校へ弁当を持っていくことができず、お昼は「トトチャブ」でうつちやるしかなかったというのである。『花終る闇』では、それはこんなふうに回想される。

学校へいっても昼飯の時間が近づいてくると私はそわそわしてくる。朝の授業の一時間めが終ると大声をあげて弁当をひろげにかかる連中もいて、そういうのは昼飯の間になる何もすることがないものだから猥談にふけるか廊下で角力をとるかして騒いでいるが、そのよこをこっそりすりぬけて私は廊下に出ると階段をおりて、校庭のすみにある水呑場へいく。そして冷めたい水をしたたかに吞んでベルトをしめあげ、体育館でバスケット・ボールの練習をしている連中の美しい足に見惚れ、またこっそりと教室にもどって自分の席にすわる。誰にも気づかれないよう、すべてこっそりとおこなわなければならない。私の父がとくに死んだことはみんな知っているけれど、だから昼弁当も作れないのだとは知られたくない。みんな大声をあげてあちらこちらにできはじめた闇市でどんな大福が、どんなカレーライスが売られているかと話しあっているが、私はニコニコ笑ってその話を聞き、しきりにうなずいたり、嘆声をあげたりしてみんなの仲間になり、誰の視線にもとまらないようにしなければならなかった。

そして、もっとつらい思い出がこのあとにつづく。

しかし、誰も知るまいと思っていたのは私だけで、若い猛禽たちの眼はとつくにすべてを見抜き、ただ知らないふりをしていただけなのではあるまいかと思う。あるとき廊下で朝鮮人の友人とすれちがったら、いたましい眼になって、小声で、トトチャブはつらいやろと、ささやかれた。トトチャブで何やと聞きかえすと、いよいよ小声になって、飯のかわりに水を飲むことや、その友人は早口にそうささやき、火がついたように走って消えてしまった。また別の日には、私のうしろの席にいる友人がいつのまにか私の机のなかにイモ入りのふかしパンの大きな塊りを丁重に新聞紙に包んで入れておいてくれた。それがパンだとわかると私は全身に血が波打ち、眼が羞しきでくらみそうになるのを感じ、パンをおしもどしてたちあがった。走って教室をでようとすると、うしろの席の友人がつづいてあとを追ってきた。廊下を走って便所のあたりまでくると友人が追いついて私を壁におしつけるようにし、羞恥で顔をまっ赤にしながらおろおろと、たのむ、食べてくれ、おれとこは何とかやっていけそうなんや、昨夜お母さんに君のことを話したら持っていったあげなさいというて作ってくれたんや、たのむよってに食べてくれ、

しどろもどろになつてうなだれてそういうのだった。感謝しなければならぬのに、私は恥とも辱ともつかないものに全身をみたされ、息ばかり荒くなって、口がきけなかった。

『花終る闇』は未完に終つたとはいえ、もちろん小説として構想された作品であつて、自伝でも回想録でもない。開高健は小説の方法についてきわめて意識的な作家であつたし、だとすれば、家族の食卓の光景にしろ、「トトチャブ」の話にしろ、事実や体験を直叙したものとしてでなく、小説の主題を承けて、よく響く効果をあげることができるよう工夫された一挿話として受けとらなくてはならないのはいうまでもない。しかし、十五歳の開高健がここに描かれたようないたましい暮しに限りなく近い生活を実際に体験し、それが異常に鋭敏な彼の内面に終生消えることのない刻印を残すことになったのはまずまちがいのないところであろう。小説で同じ話柄を扱うことをあれほど嫌つた彼が、餓鬼と化した家族の食卓の悲惨と「トトチャブ」の羞恥とにまつわる挿話にかぎって、自伝的要素の濃い『青い月曜日』、『耳の物語』、それに『輝ける闇』、『花終る闇』の四つの長篇にくりかえし織りこんだのも、その存在感、切実感が格別に強くて、別の話題に置き換えたのでは何か大事なものを伝えそこなうと感ずるところがあつたからだと思いたい。